

伝承会報

第四号 平成二十三年九月一日発行

編集発行 鈴木伸昌

久方ぶりの伝承会報 第四号の発行となりました。

今回の伝承会報は、河野先生の弟であられる勇様の著された文章を三つ掲載させていただきました。

一、昭和四十九年五月十日付で、勇様が父上（河野先生の父でもあるわけです、当然。）について著され、活版印刷された「父を偲びて」

ちなみに翌十一日は河野先生が郷里で喜寿の大会を開くご予定でありました。河野先生は三月二日に入院されたため、大会は十一月三日に延期。その後五月二十一日に薬石効なく河野先生は亡くなられました。

二、昭和五十三年五月、勇様が河野先生について著されガリ版印刷された「いわかげ文庫第三集の

『或る現代剣士の生涯、
剣と百鍊』

三、平成元年十二月、勇様が河野先生について著され活版印刷された『居合兵法無双直伝英信流第二十代宗家 河野稔百鍊』

掲載致します著述文書について、文字の表記は一部のルビが振られている箇所も含め、当時を忠実に再現するよう努めており、著述内容は勇様の意思をそのままお伝えするために、原文そのままを掲載させていただいております。「いわかげ文庫」なるものについては、誠に不勉強にして存じ上げませんが、いずれにしましても河野先生の幼少期からの歩みについて著された貴重な資料でございますので、

ご精読頂けましたら幸甚に存じます。

尚、文中にて河野先生の生誕地 大分県日田市天ヶ瀬 杉河内（あまがせすぎこうち）の歴史について記載がございますが、補足として解説文を掲載しております。ご参照下さい。

目次

- 一 父を偲びて
- 二 原文『いわかげ文庫第三集 或る現代剣士の生涯、
剣と百鍊』
- 三 原文『居合兵法無双直伝英信流第二十代宗家 河野稔百鍊』
- 四 補足資料と解説
杉河内の大火について
杉河内と河野勇様の関わりについて
杉河内周辺の交通網の発展について
- 五 御詫び 伝承会報 第三号の欠番について

一、父を偲びて

父は照り母は涙の露となり同じ恵みにそだつ幼な児

私共兄弟四人も世の常の人と変りなく、父母の限りない慈みに依り健康な体と僅乍の心の籠った遺産をもとで、平均年齢七十一才の今日では何れも孫の養育期に這入り死別した父の齢となつた。今日父の三十三回忌にあたりてその父を偲んで記憶をたどり亡き父の生涯を綴つて見度い。もともと作家でも無い私は美文として人様に読んで貰う考えも無いので、何等の虚飾も構想も用いぬ駄文での只山深く苦節の裡に幾多の難関を切り抜け、野心も慾心もすて野生の儘ま無慾なわが道を進んで他界した父の記憶に過ぎない。

父徳市は明治八年祖父幾右工門と祖母トモの二男として此の地に生を受け、父母の特別な愛を受けて八歳の年両親につれられ祖母弟妹六人と共に此の家に分家し、両親の力で成人したのである。その内に両親も老齢となり若冠十一才の頃八軒程の処迄土蔵上棟用の酒を牛を引張つて買に行つて来たと伝えられてゐる。成人して母を嫁とつた後私共の生れ育つ頃迄は両親弟妹小供と賑やかな平和な生活がつゞいてゐた。しかし平和はそれ迄であつた。明治四十年四月父の三十三才の春、乾ききつた昼下がりに春一番の強い突風と共に巻起こつた山火事は瞬く間に近隣全戸に飛火し、凄まじい大火となり、人家八十余戸を全焼し、数十町歩の山林と共に多くの焼け野原と化したのである。当日の父は一軒隣の父の姉萩原の屋根普請加勢中にて、そのまま山火事に走つて跡の我家は母と幼児のみ、母は焼けつつある奥の間に飛込んで一才の私の弟を救出するのが勢一杯、土蔵迄焼落ちてそれこそ着のみ着のまま塵一つない焼跡に立つた両親の姿がこの目に浮んで仕方がな

い。有志親族知人からの救援の皿、茶碗、諸物資と焼残りの材料でにわか作りの藁小屋で裸一貫からの第一歩がはじまつた。

農林仕事ではどんな無理な作業も恐れない父のその経営ぶりは全く無理なく私共の及ぶ処でなかつた。見透しのついた事業では生産利殖をはかり、学識の無い父は大粒のソロバンを持つてはその達成に熱心であつた。歿後の帳簿や古証文が良くそれを示してゐる。その父は全くの庶民で終生名譽的な役目を嫌つた。それで之と履歴を持たない、それが気楽な生涯の最大の基因でもあつた。

父には仏陀の教えはその頃無縁であつたが、眼界も無く意識界も無く即ち一切空なりの心境に進んだであらう。主屋馬小屋一棟の粗末な家が出来てからは之で心豊かに生涯を送れば良いとの信念で、周囲の家々が立派に立直り新築されても全く見向きもしなかつた。それで居て若い父は粗末な小屋を拠点に私共子供の教養と家計の維持挽回に体力の限りの苦闘をつゞけ、私共が成人した頃は兄弟殆ど人並の教育も終り私共の強い願望で粗末な今の主家が新築され父は家事労働の一線からのいた。それから父は自由で悠々たる生活に入り、本人にとり楽しい歳月が流れつゝあつたがそれも束の間、大正十五年八月最愛の末子東京大学在学中の一夫を関東大震災の被害の跡もなまましい慶応大学病院に失つた心痛は、言語に絶するものがあつた。最も期待をかけた若冠十九才の青年に経済的にも可能な限りの仕送りをし社会に送り出すのを楽しみにしてゐただけに全く痛ましい限りであつた。此の間は極めて平和な時代であり乍ら、之等と併行して近親に幾多の不幸が併発して父の晩年を苦しめたが、之等を良く処理した父であつた。昭和二年父の五十三才の春、親友中山松太郎氏と長兄が隨行して伊勢参宮、東京、日光、各地の旅行に出発した。その帰途京都では御大

典の盛儀に天皇を拝する光榮に浴した。地方から一步も出なかつた二人は定めし滑稽な弥次喜多振りを各地で發揮した事と思つ、その折の日光土産の足尾銅鉱石は大きく重いもので今も我屋に父の記念に伝へてゐる。

こつした無事な時代もすぎ昭和六年の満州事変を界に世情も急変したが杉河内林道現在の県道全通九大線貫通等々地方的にも開発が進み此の頃迄の父は年寄乍ら元気で好きな林道工事にも十数日出没した程である。その頃迄の私共の地方では車道もなく駅も遠く薄暗い自家発電電灯の下で徹底した自給自足の生活で、日用諸物資の買入も生産物の移出も細い里道を牛馬や背中運んだもので、その労苦は想像に余りありだつた。

他力では生死も悩みは一切は唯之祈るのみ願うのみ唱うるのみで解決すると教えられるが父は形の上では極めてそうした信仰に無関心で人間は正しく、強く、素直であれば、救われるのだと私共に都度話してくれたものだつた。その人生観は可成つとくその場その場を楽しむ風に見えたが、之等真理の問題も無言の裡に悟つて居た様である。それらを物語る父の樂天振りは徹底したものであつた。父は近隣カイワイでの大酒豪だつたが、來訪の吞相手の客と打興した時はそれが集穫中に雨が降つてきても取合われないという始末。外出先で一度親しい友達と呑合つたら、何物も忘れて酒が何日でもつづいた。それでいて懸引もなく、野心もなく、之等の人達との交友は終生つゞいた。反面仕事に立向かつたら、恐るゝものもない異常の怪力で、ねばり強く、入念な父であつた。父の手形見は我が家の各所の田畑や山に残されて居てなつかしい限りである。それで居て食生活のみは惜しまなかつた。当時の事であるが、樽酒、ホシタラ、塩鯽、クジラ、鰻、等と冷蔵庫

もないのに常時大量に備蓄してあつた。

何等野望のない父は唯一の好みは酒で、呑む程に、酔う程に、歌うそれも佳境に入れば無限で、今からみるとリバイバルの歌の数知れず、文句も節もその声も立派なものであつた。熟睡中も文句も違わずネゴトで歌つたもので、その心持は相当広かつたであらう。若い日の思考力も体力も酒がそのエネルギーであつたらしい。一滴も呑めぬ母は一生の長い間大変だつた事だらう。一面万事實素で、変つた石や珍木等に趣味を持ち、老境に入つてからは之等を相手に悦に入つて居た。そんな父は晩年、酒はいくら飲んでもよいがタダ酒とヒヤ酒は飲むな、兄弟仲良くせよと口グセの様に私共に語つてくれたものだつた。

昭和十三年二男正生兄が上の屋敷に分家し、地方事務所勤務中の私が自家の祭事をとる様になつた頃は、急に体力も落ちて来たが、昭和十二年日支事變の輝々たる戦果の真中で父の主催で祖父の五十四忌法要を営み、その日までは父の五人兄弟は皆元気で心から故人の冥福を祈つたものである。父の言葉に過ぎざるを追う勿れ。いまだ来らざるを待ち設くる事勿れ。過去は過ぎたり未来は今だ来らざるなりを教へと一致し、毎日を思う通りに暮らせ。欲はいらない明日の事を思うな。次代の事に心にかけるな。と言いつつ、生涯を終つた父は、いつの間にかそんな哲学を学んだのだらう。盡日春を求めて春を得ずの私共大いに反省すべきか。

大東亞戦争が南方に拡大され物資の欠乏刻々加わり、父の最大の好物の酒も入手困難で私の勤務先の友人が交互に協力してくれたり食堂の業務用酒を懐に入れて帰えつたり、辛うじて父の最後迄供する事が叶つた事は、父の徳であり福であつたと思つと嬉しい。父の持病の胃痛は昨今の癌であつたかも知れぬ。それに激しいゼンソクのホツサガ

加わり、好物の酒量がへるに随い体力が衰えて、病勢加わり遂に昭和十七年六月十一日その生涯を終った。

くしくも今日は父が終生心の中でのみ誇にして居たかと思う長男稔百錬が、日本武道眞剣道最高位に到達し、錦を故郷に飾る喜寿の記念武道大会を明日にして父の三十三回忌の法要を今日営むに当り、そのありし日の父を偲び生涯はかり知れない親みを受けた、今ではほんの限られた御在世の知己の人々に心の中の御礼をのべ度い。迷うが故に三界域あり、悟が故に十萬空なり、本来東西なし、何処にか南北あらん

昭和四十九年五月十日

合掌

釈 顯 徳 故徳市三男 河野 勇

二、いわかげ文庫第三集 或る現代剣士の生涯

剣と百錬

数億年の間に幾度となく繰返されたであろう地殻の変動で特に私共の地方は大阿蘇火山帯の中での地形がまことに複雑であり、第一期二期からの古成層と新成層が反轉重複し折重なる累々たる山々の頂上近くにも水流に磨き洗はれた河砂利が堆積されたり広大な凝灰岩が覆流

されたり古代の天地の創造の反復が真に不思議でならない。

その耶馬溪にもおとらぬ奇岩と溪谷の山里に生れ自然に近い成長を果した河野稔百錬は父徳市の二男として長男倉太が幼折した跡とて両親の限り無い愛に浸つて十代の春を迎えたが突如発生した大火災で実家も近隣全山を包み焼失しその生涯を大きく変えた。

住むに家なく学校も無い少年稔は三里を距てた伯父帆足林治の家に預けられ古武士の如き厳正な養育を受けた。伯父は強い仏教徒で尚古典に詳しく書画骨董の類を好み且つ集め萬事につけ大衆の世話をする事を喜びとし、一面芸術に熱中し陶器の研究の未上り窯を築造して之が製造に取組み豊州焼と銘名してその作品は大正天皇の御嘉納を受けた程であり幼年期の稔の性格にも影響が少く無い。当時の八幡小学校の担任は神田影雄先生で陸学出身の之亦大和魂のかたまりの様なそして優しい人柄の人で少年稔に終生大変な期待をかけて居た様である。此の時代には少年向の武勇傳の豆本が出廻り又少年雑誌にも数々の古代剣士や忍者が登場して居たので、稔も勉学の傍ら少なからず之等にも刺激を受けたと思はれる。

やがて小学校を卒へた稔は日田町の県立農林学校に入学し先づその剣道部に席を置き、当時の師範北村先生を大いに崇拜し精進した。

こうして伯父、神田先生、北村先生の人格を若い身にそのまま取入れた様である。

此の頃中央では、上田馬の允の流をくむ高野佐三郎が山岡鉄舟に学び大日本剣道形を決定し、川崎、中山、持田の諸剣士を育成し、やがて日本武道は大正の初期に入り、まことに盛になり陸海軍も之を取入れ、日本精神の眞髓として貴重なものとされた。

明治の末期京都岡崎に武徳殿が建てられ、幾度かの天覧試合が行われ

た記録があり、戦前迄破竹の如き隆盛振りで頼もしい限りであった。一方稔の学生時代は冷静知能型で、之等の趨勢に左右されず専ら学業に専念し、常に代表的な秀才で郷土では数少ない高校教育を受け、一方前記北村先生の最愛の弟子として剣道初段を以て卒業した。

中央では武術専門学校が開校され一方有信館にては根岸信五郎が神道無念流を幾多の内弟子と共に励んで居たが、稔は営林省の一職員として國有林のある山林地帯で禽獣と共に之を友としての生活が続けられ之等とは程遠く、専ら刀剣の愛好と剣道の練習に限られて居た。獵銃を持ち林野を歩く事が多かった。剣の道を極むる人の唱ゆる心、氣力の三原則も見、映、觀の三法も皆之鳥獣をねらふ時の条件と共通する処がある。二十六番の小銃銃で高く飛び雉や鳩を良く落してゐた、繊細周密で見る眼は常に適確であつた。又整理整頓家で、小学生の頃自分の留守に机上が乱れて居るとあたりの者を泣いて困らせたと言ふ話がある。此の潔癖さは生涯何かの形でつきまとつた様に思はれる。初彼がいさゝか磨きつつあつた剣の道も、少しづつ集めた刀の研究も、之を生し之を極むるには阪府の地の外に無いと決意し、職を辞して大阪市鶴町に居を移し秋田木材に勤務の傍市中の道場通いが始まつた。その頃の大阪には幸いにして中山博道、穂岐山、福井の諸範士が居られ之等偉大な剣士に崇高な信頼を堅め芸は切磋にあり琢磨に熟すと決心し新たな精進に突き進んだ。

宮本武蔵は父新免無二斎にねらわれて家を飛出し剣の道を極めたところ、ト傳は五畿七道を武者修行して当時最強の剣士となり『五月雨は霞か涙かほととぎす我が名をあげよ雲の上まで』の歌を残した。彼が我が郷土を捨て営林省を去り大阪に住居し、之等偉大な人々に接し多くの劍友と共に歩く事が無かつたら我が古里の單なる一人に終つた事

と思ふ

名僧沢庵が『たゞずむな、行くもかえるも居すわるな、ねるな、おきるな、知るも知らぬも』と歌つたのは剣の道でもある。彼が前記、中山、穂岐山(十八代)両先生にめぐり会へた事で、流派を無双直伝英信流に決定づけたのである。

中山先生は後神伝流を極めたが、彼は穂岐山十八代、福井十九代を師としてその奥義を学び取る為に凡てを捨てて精進に精進を重ねてきた。昭和十三年には居合道錬士として知名の剣士や若き修道者と数多く交流し、幾つかの研究団体も出来、居合道と剣道を両翼として昼夜を分たず我身を切りきざんだ。抜刀術の祖林崎大明神を深く崇拜し、之を我家に祭り此の道に徹した。一面武蔵の五輪の書を初め古今の武書を精読しその奥義をどれ程さぐり求めた事かと思ふ。柳生十兵衛三蔵は理知で戦法に勝つたが、その根底にある心の迷を捨てる修行に命をかけたとある。剣には一点の妥協も無くその眞髓を極むる事は容易ではない。

戦雲全世界を包む昭和十七年頃上京して偉人頭山満、陸相荒木洗十郎を訪れ、三度に涉り大陸に第一線の将士にも接し、かくして生死の境にある武人のあるべき姿を学び得る処多かつたのだ。

勝ちたい、生きのび度い、死にたくないの一念から悟つては迷い、又迷つては悟る。長い苦闘の中で幾度となくより強い相手を求め戦ふ剣の道は、近代戦で敵地深く進む兵士にも同じだ。幕末の奇兵隊は剣を持って火器に対峙した。之等兵器の進んだ中で松村、平山、男谷等々の武士もその時代に剣の道にひたすら進んだ。かくして綿密な剣、精神力の剣、合理的な剣は各流派の中に息づき、今尚日本古武道として又我が日本の底力として剣道柔道と共に將に花盛りの觀あり、たのも

しい限りである。

平和な近世ではその目的が己を斬る事によつて心の業とし、その裂帛の気合の中から静心明氣の残心の構えとなり、豪放の中にたゞならぬ風格と氣品を併せ、常に劔士の姿は、實にさわやかで感じが良い。

当時大阪では志賀矩氏、堀寅次氏等と居合道八重垣会と云ふ専門団体を結成し、武徳会大阪支部と共に彼はその中核として府警道場、市体育館道場、南海道場等に毎夜通い、一面古今の武道書を寸暇を惜しみ精読し、自他の練成につとめ、昭和十四年頃は既に『無双直傳英信流居合兵法』を著述出版して居て居る。

愈々戦乱も本土に迫り大阪も何時襲撃されるや知れぬ頃、生涯の凡てを打込んだ刀劔と長男隆を郷里の私の処に疎開させ、その間都度帰国しては二階の広間で抜刀して居た。之等軍国時代は稍々異つた国防の信念で斯界の人々と共に朝野あげて戦ふ時代の武術としてものではやされたものであつた。

前記した著書には当時の文相荒木貞夫、陸相林洗十郎、偉人頭山満国士に範士高野佐三郎、鳥谷八十八、中山博道、小川金之助、橋本統陽更に堀口武舟等の日本最高の人々の題字が巻頭に輝いて居る。

その書を開くと『劔術は鞘の中に勝敗がある』抜刀の瞬間の第一刀に『てきまる』動揺せぬ心氣只無心無念の中から発する事理一致、臨機の術なりと説かれてゐる。

百錬も学徒の頃より劔道一筋の二十五年間を経て昭和初期より両道を学び、歿年までの五十年間を此の道で終始した事となる。

大阪市も戦火に依り大部分が灰となり、市民は生き延ぶる事に精一杯で、焼跡に慣れぬ物腰で芋や南瓜を作つてゐたが、何事にも一徹な百錬は見事な作物を広く作り、町内の評判物であつた。然し居張りまく

る進駐軍の態度にはいささか腕に覺のある事とて一層つらくこたえた事と思ふ。

戦後日本武道も米軍の理解ようやく高まり、劔道はスポーツとして認められ、一步遅れて隠忍持久長い間日の目を見なかつた眞劔法がこゝに久々振り立ち上つた。その間も百錬はこの庄政下に屈せず黙々と修練すると共に、在阪の同志は勿論全国の劔友と連契を保ちつゝ比の日を待つたのである。彼が生れ育つた九州薩摩島津家流として傳えられる示現流の祖東郷藤兵衛がその祖金子新九郎に乞願する事六十余日遂にゆるされて入門一刀必殺の業を学び取つたと言ふ。

又九州肥後人吉の生れ丸目蔵人がはるばる上京上泉伊勢守の門に無理矢理入門新陰流の奥義を極め、八十四名の門人一に選ばれ、足利將軍の御前試合最高の勝者として体捨流を創始したと傳えられてゐる。

又伊藤一刀斎は、隣家の赤子の大樹の下の寝入る姿から無心の境を悟り夢想劔一刀流を創始し、弟子神子上典膳、後の小野次郎工門忠明をして家康秀忠の師範代となつたと云ふ。其他柳生宗矩は父宗嚴に依り柳生新陰流をたゞき込まれ、此の時代代表的劔士として秀忠家光の劔方指南として有名で、その劔は心法と印されて居る。名僧沢庵との結びつきで悟つた、慶長十四年沢庵は京五山の一臨濟宗大徳寺第一座と云ふ位であつた。

その劔禅一致の教へは、劔に依り煩惱をたち切り諸佛不動の域に到達するを大目的とする、と決定づけて居る。

百錬は必ず以上の古代劔豪の必殺劔を現代に取入れ如何に生かすかに古代著書の中で考へあぐんだと思われる。

私共が抜刀を横から見て居ると、之は人に見せるものではないと云い、テレビ出演などは之等の意から大變之をきらつて居た。自分の心を修

する業として、宗矩の心法そのものの意義が判然としておる。
明治九年の廢刀令とは全く異なる武装解除の一期もこゝに終り、武道の
振興は雨後の筍の如く繁栄し、昭和二十九年五月には全国古武道の諸
人が全日本居合道連盟を結成し、時の総理池田勇人を会長に推しスタ
ートしたのである。

百鍊は当時既に英信流二十代宗家の紹統允可に依り、一面連盟理事長
として事務局を自宅に置き、本義の研鑽を併せて会の発展に努力し、
四十年八月池田会長逝去と同時に鎌倉に御住みの閑院宮純仁殿下を会
長に推戴して会員七千人余繁栄し、年々京都其他で各種の大会を催さ
れ、段位の認紹審査、機関紙発行、後進の指導につとめた様である。
その間、剣道連盟に居合道部併設に依り我が居合道連盟の分断が行は
れんとしたが、之を喰い止めた事。そして当時の航空自衛隊高木空将
と計り更に数千名の隊員居合人を得て一大躍進をとげたのである。
一方英信流では三十七年頃土佐の居合下村派の山本と云ふ剣士からこ
ちらが英信流十七代だと名乗り出たゆゑ、之が調査に乗出し、全くの
異説であり十七代は大江氏、十八代穂岐山氏、十九代福井春政氏で二
十代が初めて大阪の河野である事に、之に回答し、後進の去就をあや
まらせぬ事につとめた。

又大阪に於ける居合では中垣、谷島、尾形、水ノ尾、平井、清水、池
田、朝枝、福井、内田の諸剣士とは特に親しく、常にその中核として
練成につとめた中でも福井虎雄氏は三度の渡支の際、天津領事館で親
しくした同氏が百鍊の没後推されて二十代故百鍊から流祖に傳る宝劔
古文書を受け、二十一代無双直傳居合兵法二十一代宗家を継紹された
事は奇縁として又目出度き限りである。

終生日本刀を愛した百鍊は常に刀劔武具武書、書画を友とし、中でも

刀に関しては可成詳しく鑑識も持つて居た。

私には之が知識はないが、古代では秀吉の刀劔三作の話を知つて居た。
その一は粟田口住藤四郎吉光と云い、二は相州住五郎正宗であり、今
一人は越前住郷義弘と聞く。とても等には縁がなかつたが、自慢の
刀劔甲冑のたゞ中に座してすこぶる御満悦であつた。一面人情もろい、
酒を愛しその末、子供らしい傍若振りもあつた。豊富な話題で人を笑
はせ、又あきさせぬ勢一杯のふるまい振りで時には人々を困らせた徹
底振りで幾多の人々に少なからず御世話もかけたと思ふ。

連盟理事長として、宗家として年中国内各地に旅し、幾多の人々と接
し、その風物を愛し、中でも北海道、佐渡、南畿、岡山、大三島、平
戸、等々には幾度となく旅し、それら地方の人々には特に愛顧を受け
た事と思ふ。

昭和八年英信流居合術全を著し、翌九年剣道錬士となり、更に十三年
居合道錬士となり、十五年居合道達士となり、二十一年範士の稱号を
受け、二十五年英信流宗家、三十四年剣道武徳会範士九段を受け、三
十八年に名人十段位と成り、此の間居合道、居合道図譜、居合術叢書、
歎異録、居合道真諦、等々を著述した忙しい充実した人生であつた。

あとがき

以上は幼少より劔一筋に生き昭和四十九年五月二十一日、七十七才を
以て劔友その他多くの人々から惜しまれて大阪日赤病院にて他界した
故河野百鍊、戒名英信院天劔百鍊禅居士の生涯をその末弟の私を知る
範囲で、私の感じたまゝを一気に綴つた拙い記録であり数多くの人々
への謝恩を込めたもので、文中記述が前後したり重複したりして終つ
た。

昭和五十三年五月

河野 勇 七十五才

附 宮本武蔵作

五輪書より

(誤字誤句多し 寫中)

夫兵法といふ事武家の法也。將たる者はとり分け此の法を行ひたる者も此の道を知るべし。今世の中の兵法の道を慥かに辨えたる武士なし。先道を顯して有は佛法として人をたすくる道又儒道として文の道を糺し。医者と云いて諸病を治す道。或は歌道者として和歌の道を教へ、或は数寄者、弓法者、其他諸藝諸能までも思い思いに稽古して心にすくものなり。

兵法の道にすく人まれ也共武士たる者は己の分際程は兵の法をばつとむべきや。大方武士の思ふ心をはかるに武士は只死ぬると云ふ道を嗜む事と覚ゆる程也。死する道に於いては武士ばかりに限らず出家にても女にては百姓以下に至るまで義理を知り恥を思い死すべき也。その差別はなき也。武士の兵法を行ふ道は何事に於いても人にすぐるところを本とし、或は一身の切合に勝ち或は数人の戦に勝ち主君のため我身のため、名をあげ身を立てんと思ふ。是兵法の徳をもつてなり。又世の中に兵法の道をならつて實の役に立つまじきと思ふ心あるべし。其の義に於ては何時にても役に立つ様稽古し、役に立つ様教ゆる事は兵法の實也(中畧)

兵法の事

一、此の兵法の書五卷に仕立つる事。五つの道を分ち、一卷一卷にしてその利を知らしめんが為に地 火水 風 空として五卷に書顯すなり。

地の卷に於ては兵法の道を我一流の見立。劔法一通りにしてはまことに道得がたし。大きな処より小さき処を知り、浅きより深きにいたる。直なる道に地形を引直すに依つて地の卷と名付くる也。

第二水の卷 水を本とし心も水になるなり、水は方圓のうつはに隋い一滴なるも蒼海となる。水に碧潭の色あり清き処に用いて一流の事を此の卷にも書顯す也。劔術一通りの理さだかに見分け一人の敵に自由に勝つ也。世界の人皆に勝つ也。一人に勝つ者は千万の敵にも同意也。將たる者の兵法は小さき事を大きくなす事。尺のかたをもちて大佛を建つる同じ。箇様な義こまやかに書分けがたし。一を以て萬を知る事兵法の利也。この一流の事此の水の卷に書く也。

第三火の卷に戦の事書く也、火は大小となり、たけき心有りて合戦の事を書く也。一人と一人の戦も萬と萬の戦いも同之也。心大きな事なし、心少くなして能く吟味して見るべし。大きな処は見分け易し。小さき所見え難し、其の子細、大人数の事は即座にもとおりがたし。一人の事は心一つにてかわる事早きによつて小さき所知る事得難し。能く吟味あるべし。此の火の卷の事ははやき事の間の事なるに依つて日々手馴れ常の如く思い心のかわらぬ処の兵法肝要也。然るに戦勝負の所を火の卷に書顯す也。

第四風の卷 此の卷を風の卷とする事、我一流の事にあらず、此の中の兵法、其の流れ流れの事を記載する所也。風と云ふに於て昔の風、今の風、其の家々の風など認めれば世間の兵法其の流々のしわざをさだかに書顯す。之風也。他の事を能く知らずして自のわきまえ成難し、道々事々を行ふに外道と云ふ心有りと見れば實の道にあらず。實の道をさわかめれば少心のゆがみに付き、後大きくゆがむもの也。吟味すべし。他の兵法劔術ばかりと世に思ふ事尤也。我兵法の利わざに於ても格別の儀也。世間兵法を知らしめんが為に風の卷として風の卷を書顯す也。

第五空の卷 此の卷空の卷と書顯す也。空を云い出すよりしては、何

をか奥と云い何をか口といわんや。道理を得ては道理をはなれ兵法の道、己と自由とありて（以下略）

三、居合兵法無双直伝英信流二十代宗家 河野稔百錬

耶馬溪にも劣らぬ奇岩と、溪谷の山里に生まれた河野稔百錬は、父徳市の二男として長男倉太が幼逝した直後の両親から限らない愛に浸った十才の春、突如として発生した大火で、実家も神社・学校をはじめ、近隣七十数戸と全山悉く焼失した事で、その生涯を大きく変えた。

住むに家なき彼は、三里を距てた伯父・帆足林治の家に預けられ、古武士の如く厳格な養育を受けた。伯父は古典に詳しく、強い仏教徒で書画・骨董の類を好み集め、或は大衆の世話を良くし、芸術に熱中し、陶器の研究の未上り窯を築造し、民芸・豊州焼と銘打って、その作品は大正天皇の御嘉納を受けた程で、幼年期の稔のその性格に何等

かの影響があった様で、その他当時小学校担任・陸軍出で大和魂のかたまりの様な神田影雄先生の大きな期待を受け教えられ、之亦大きな刺激を得た事と思う。

この時代は大正初期とて、少年向の武勇伝の豆本が出廻り、また少年雑誌にも数々の古代剣士や忍者が登場して居た。彼も独学の傍ら之等を読んでいた。

小学校を終えた稔は、隣町日田町の県立農林学校に進学するや剣道部に席を置き、当時の師範北村先生を大いに崇拜し精進した。そして伯父や神田・北村先生の人格を若い身にそのまま取り入れた。

比の頃中央では、上田馬の允の流れをくむ高野佐三郎が山岡鉄舟の大日本剣道形と決定し、川崎・中山・持田の諸剣士を育成し、後に陸海軍も之を取り入れ、今や日本精神の真髄とされ、京都岡崎に武徳殿が建ち、幾度かの天覧試合も行なわれた記録がある。かくして此の隆盛振りが去る戦前迄破竹の勢いで続けられた。尚之と前後し、武術専門学

校も開設され、一方有信館では根岸信五郎が既に真剣法神道無念流を編法し、幾多の内弟子と共に励んでいた。

此の頃の稔は、学業を終わり営林署の一職員として国有林のある岡山・広島で、山林地帯での禽獣を友とした生活が続けられて居たが、常に剣の道のみは怠らず、心気力の三原則も見映観の三法も学び、余暇に鳥獣をねらう瞬間にも常に共通の心理をわきまえ、三十六番口径の猟銃で高く飛ぶ雉や鳩をも良く落して居た。

稔は、学生時代から冷静な知能型で代表的な秀才で、その上先輩・恩師に恵まれ、此の頃数少ない高等教育を受け、卒業時は剣道初段であった。繊細緻密で見る目は常に的確で、子供の頃留守中自分の机上が乱れた位で泣いて困らせたという話がある。

扨、営林署偏地での武道の修練には限界があるので、営林署を退職し秋田木材大阪支店に勤務となるや魚が水を得た如く、市内の各道場に通い或は学び或は教える毎日が続けられた。その頃は、剣道四段であり乍ら、四国出身の英信流十八代穂岐山十九代福井春政宗家に接し、

学ぶ機会が多くなり昭和六年頃ともなると右、福井宗家を顧問とし、志賀範士を会長とする八重垣会を結成猛練習を続けた。千日稽古二十万本抜刀等々我が身を切りぎざんだ。英信流居合道の奥義を学び取る毎日が続き、斯くして昭和十三年錬士となり、知名の剣士若き修道者と数多くの人々と交流し、居合道と剣道を両翼としての日夜を送り、一方抜刀術の始祖山形の林崎大明神を深く崇拜し、之を分神し我家にも祭り神前抜刀しつつ此の道に徹して居た。宮本武蔵の五輪の書を始め古今の武書を精読しつつ道を探り求める毎日である。

柳生十兵衛三蔵は理智の戦法に勝つ根底は、心の迷いを捨てる修業に命をかけよと説かれた。剣には一点の妥協も許されぬ、この真髓を極むる事は容易でない。戦雲全世界を包む昭和十七年上京し、偉人頭山満・陸相荒木洗十郎を訪れ、三度に渉り大陸第一線の将兵に接し、生死の境にある武人のあるべき姿を学び得た。勝ち度い、生きのび度い、死に度くない、と迷っては悟りつつ、敵地深く進む近代戦でも同

じで、幕末の奇兵隊が剣を持って火器にたいじ対峙せる姿又然り。終戦で平和な近世ではその目的は、己を斬る事に依つての心の業として、裂帛れいぱくの気合いの中から静心・明氣げんしんの残心の構えに変わり、豪放ごうほうの中にただならぬ風格と氣品を併あわせ備えた剣士の姿こそが実にさわやかで尊とつばしいものである。

後百鍊は、かくして昭和二年英信流十八代入門後、星霜十二年を経て、十九代福井宗家より見込まれてその二十代紹統しやうとう允可いんかに依り之を継承し、全居連理事長として事務局を自邸ていに置き本義げんぎの研鑽けんざんと会の発展につとめ、池田勇人会長死去後はいち早く鎌倉の閑院純仁を会長に推戴し、七千人会員の中心として大会行事・段位だんい認証にんしょう・審査・機関紙編集発行・後進の指導育成に努めた。その間他方剣道連盟に居合道部が併設され、我が全居連の分断がなされんとしたが、之を喰く止め、更に四国の同流下村派山本剣士を以てこちらが同十七代なりと名乗り出たため、早速之が調査に入り全くの異説なる事判明し解決したものだ。

そもそも英信流は中世より土佐山内家に属し、代々四国不出のもので、福井十九代に師事する百鍊が初めてはんぶ阪府の地に二十代として継承された事にも依るが、福井十九代の説得で無事落着した。

この間自らは、剣道九段・居合道十段と昇段し、昭和三十八年には更に名人位を冠かんせられ、愈々責務の重大さを覚え一層この道に専念した。この頃、同志のはからいと郷土の人々の計画で生家の庭先に誕生たんとしょう碑ひが建てられ、全国知名剣士三十八人出席、建碑居合大会が行なわれた。

百鍊は、初心の頃から日本刀を愛し、稽古かたわの傍ら機会ある毎に入手し高級な刀を持つ様に成るや、之が鑑定研究を重ねつつも、戦争たけなわの頃は既に二十振を数え、戦禍せんかを恐れて之を郷里そかいに疎開させ、年間数度帰郷し愛刀にまみえつつ手入れを怠たらず無事終戦を迎え、文化財として今日に至って居る。

彼は、終戦直後から戦災で灰塵となった大阪四天王寺の復興局に勤めつつ、連盟活動で晩年まで努め四天王寺も見事に完成した。これが

奇縁^{きえん}で告別式も同所で執行、今は四天王墓地に静かに眠っている。

酒は百薬の長と之を愛し、花の生涯は亡父のそれに似てたくましく、人に接すると先ず酒、その酒豪^{しゅうこう}振りたるや天下第一品談^{ひんたん}するに奇智百出^{きちひゃくしゅつ}、人を笑わせ興^{きょう}せさせ、その赴^{おもむ}く処無限^{むげん}である。アリランを歌えば、マリモの歌と変わり、またドイツに及び、最後はシバシ別れの又来^{また}るまではと唄い、賑やかだった長い酒宴も元の静寂^{せいじやく}にもどる。

その無邪気さに引換え、時を異にすれば、一気にしてその眼光^{まなざし}は百鬼をもくしく鋭^{すまじ}さに変り、門外漢^{もんがいかん}の筆者から見て全く不思議である。草木花木を愛し、中でも野菊の花を好む女性的な一面も見受ける。神社仏閣の場末に捨てられた幼木を持ち帰り、優しく育てている姿は剣士とは想像されぬ。

彼の忙しかった生涯にも、二人の男子を授かったが、彼等は父の流派を継^{ついで}ごうとせず、長男は大阪市役所の幹部職員として長年勤務中で、次男は自営業従事それぞれ独立し、未亡人は名張市に住居を建設し、

残された武具・甲冑^{かちゅう}、無数の蔵書著書の中で故人を思い浮かべその冥福を祈る毎日を送っている。

稔百鍊^{ねいひゃくれん}が喜寿^{きじゆ}を前にして、郷土での居合道大会に全国剣士を迎える案内を出し、郷土天瀬中央公民館での諸般の準備を終った途中発病し、之等行事を延期せる直後の昭和四十九年五月二十一日大阪の日赤病院でかえらぬ人となった。

その生涯は、常に無数の居合人から限らない信頼と敬愛を受けつつ他界したのである。

筆者は百鍊の末弟で、之は身近く知った見聞記である。英信院天剣百鍊居士の生前を綴り、多くの方々への謝恩に代えたものであり、今もし霊あるものなら地下で宮本武蔵の辞世『五月雨は露か涙かホトトギス我が名を上げよ雲の上まで』。名僧沢庵の『たたずむな行くなかえりな居すわるなねるなおきるな知るも知らぬも』と口ずさんでいるであらう。

平成元年十二月 河野 勇 (八十六才)

以上、河野勇様の著述文書の掲載終了。

四、補足資料と解説

杉河内の大火について

著述の中に出てくる大火とは杉河内で発生した大規模な火災を示しており、当時の状況を日田市史にて垣間見ることが出来ます。

杉河内の大火（日田市史より一部抜粋）

『明治四十年(西一九〇七)三月一三日中川村杉の河内部落の火災はまれに見る大火であった。日隈文書はその状況を次のように記している。

明治四十三年三月十三日中川村字杉河内大火災 午後貳時頃ヨリ
発火時時間余リデ土穴ヨリ、穴森、下河内、玖珠郡万年村ノ内、向河
内合計戸数五十一戸穴森二ヶ戸を残す外右部落全部焼失セリ。原因は
土穴ヨリ二丁程当方ノ刈野山焼ノ火ヨリ起リ小杉山ニ移リ、夫レヨリ
土穴に類火セリト。』

杉河内と河野勇様の関わりについて

河野勇様について解説させて頂きます。

勇様は村会議員を勤められ、地元杉河内の交通網不足問題の解消、山村合併推進の活動にご尽力されました。

交通網不足問題については、昭和三十二年に杉河内駅（JR九州旅客鉄道所有 久大本線 天ヶ瀬より東方へ四・一km先）の開設に取り組みました。

また、昭和二十九年に持ち上がった山村合併推進活動については山村合併促進協議会委員として現日田市の大元となる栄村(中川、馬原、

五馬の三村を対象。後に町制施行により改称して天ヶ瀬町となる)の合併にご尽力されました。

杉河内周辺の交通網の発展について

昭和九年から鉄道網の設置が推進されており、河野先生が杉河内におられた学生時代、または本州に向け杉河内を発つ際は交通網の整備がなされていなかったこととなります。

山間の村からの往来について、当時の苦勞は如何ほどのものだったのか。具体的な数値で申しますと、進学先であった日田農林高等学校のある日田駅は杉河内より西方へ十六・〇km先にあります。

現在の久大本線 日田駅までの経路で申しますと、河野家 杉河内駅 天ヶ瀬駅 日田駅となり、所要時間は二十四分。いかに河野家から日田が遠かったかは想像するに難くありません。

五、御詫び 伝承会報 第三号の欠番について

今回の会報の内容とは関連ございませんが、刊行物について「第三号」を欠番扱いとさせて頂いてお詫び申し上げます。

理由としましては、第三号は居合で使用される名称の登録商標化に対する抗議文として刊行しており、河野先生が生前お使いになられていた言葉であったこと、また武道を志す者であれば登録商標化など考えに及ばないことに言及する内容となっております。内容について当会にて検討した結果、インターネットが多くの方々にとって有益な交流の場として在ることを考慮し、ホームページ上で掲載しないことと致しました。